

文明批判としてのハイデガー「詩人のように人間は住まう」

鎌 田 学
Manabu KAMATA

問いの始まり

2008年アメリカ発金融危機、この「100年に一度の出来事」について様々な解説が連日報道された。或る識者のコメントのなかで「住宅はアメリカ人の夢である」という発言があった。しかし、住宅の夢を持つのは無論アメリカ人ばかりではない。狭い国土に多数が住む日本人なら、なおさらであろう。さらにいえば、人間ならば誰もそうなのだと思う。たとえばホームレス。集めた段ボールを身体サイズに器用に組み立て、その上をブルーのビニールシートで覆うことで、外界とは区別される自分の空間、住まいを確保している¹⁾。その名とは裏腹に、彼らにもホームはある。

では、一体人間にとって、住まうとはそもそもどのようなことだろうか。

応答—その1

つねにこの問題に関心を持ち続けている人としてまず考えられるのは、建築家である。あえて推測すれば、彼らが考えることは、おそらく「空間を人間化する」²⁾程度のことはなかろうか。それが抽象的だというのなら、「環境と財布にやさしい省エネ」あるいは「快適性」という謳い文句に代表される、居住者にとっての実用性と言い換えてもいい。他方で、あまりにも機能に偏することへのカウンターバランスとして、「ゆとり」あるいは「むだ」の要素を取り入れる場合も少なくないかもしれない。しかし、いずれにせよ、機能主義的な発想を住まうことの根本におく限り、人間が住むということの本質をどれだけ射当てているか疑問である。なぜなら、機能なるものは、現

代文明が人間に押し付け、また人間がそれに順応した一つの価値にすぎないからである。

応答—その2

ところで、本論が取り上げるハイデガーは、彼独自の問題構成において先の問い、つまり、一体人間にとって、住まうとはそもそもどのようなことだろうか、に答えようとするが、その際、住まいの機能主義という安易な考え方に陥らないのは言うまでもない。加えて、この点こそ強調しておかねばならないが、およそ彼にとって、住宅という物を所有することと、ここで問われる住まうこととは全く無関係である。したがって、ハイデガーによれば、住宅を仮に持たない人（真のホームレス）がいても、その人から住まうということを控除することは原理的にできない。

ハイデガーの思考の行き方は、「詩人のなかの詩人」であるヘルダーリンの詩世界に耳を傾けることによって為しとげられる³⁾。すなわち、ヘルダーリンの詩句「詩人のように人間は住まう（*dichterisch wohnt Mensch*）」に追従しつつ自説を展開する。そこで重要になる点は、「住まう」仕方としての「詩人のように」という部分である。単なる住まうことではなく、詩人的なものの内実が問われるわけである。もちろん、「住まう」と「詩人のように」の関係を検討することは、詩作とに与えられたハイデガー的含意を吟味することへまっすぐにつながる。

本論では、1951年に行われたハイデガーの簡潔かつ難解な講演「詩人のように人間は住まう」を主な手がかりとする⁴⁾。

1 「住宅不足」の問題か

「われわれの住生活は、住まうことの困窮に悩まされている。たとえそうでないとしても、われわれの今日の住まうことは、仕事に駆り立てられ、利益や成功を求めて落ち着きなく、娯楽産業やリクリエーション産業の虜になっている。」(VA 181)

ドイツの「無条件降伏」から6年経ても、国内には戦争の爪痕がまだ残り、街の復興が道半ばであることが、この講演冒頭の言葉によってうかがい知れる。と同時に、今日の私たちと程度の差はあれ同じように、当時の人々が何かに駆り立てられて、せわしく生活する様子も、である。

こうした時代背景のもとで、ヘルダーリンの詩句「詩人のように人間は住まう」をハイデガーは敬意を払ってとり上げるが、この詩句が与えかねない誤解を予防するために、次のように注意を促す。

「住まうとは、住居を所有していることだなどと言っているのでは決してない。そしてまた、詩人的なものとは、詩的な想像力の非現実的な遊戯にすぎないと言っているのでもない。」(VA 182)

詩人的なものとは、繰り返すまでもなく、空想的なものを指すわけではない。また、住まうことについては、ハイデガーの意図に従い、人間である以上誰もが住まうというふうに正しく理解しなければならない。この前提に立つならば、「(それゆえ)住まうことについての通常概念を手放すことになる。もしそうした通俗的な考えに立つと、住まうことは、人間がおこなういろいろな行為のうちの一つに過ぎないことになる。われわれは、街で働くが、郊外に住む。旅行に出かければ、ある時はここに、またある時は別のところに住む。そのように考えられた住まうことは、いつでも、ただ単に寝泊まりする場所があるだけだということである。」(VA 183)

ハイデガーによれば、住まうことは、詩人的なものにもとづく。では、詩人的なものの根底に潜んでいる詩作とは、どのような事柄を指すのであろうか。その最初の性格づけを次に行いたい。

2 「住まわせること」としての詩作

1935、36年に行われた講演にもとづく「芸術作品の起源」は、狭義の詩作についてこう語っていた。

「言葉は人間にとってその都度はじめて存在者を存在者として開示する、かの生起であるがゆえに、詩つまり狭義の詩作は、本質的な意味で最も根源的な詩作である。」(GA 5, 62)

「存在者を存在者として開示する」という表現を、51年のハイデガーはとらないが、基本的な考え方には変化がないとみていい⁵⁾。

さて、ヘルダーリンにおける詩作について、ハイデガーは先ず以下のように言う。

「詩作は、住むことをなによりもまず、住むことであらしめる(Wohnenlassen)ということである。詩作は、本来的に住まわせることである。」(VA 183)

さらに、ハイデガーは続けて言う。

「詩作は、住むことであらしめることとして、一つの建てる(Bauen)ことである。」⁶⁾(ebd.)

ハイデガーの考えに従うと、建てることには二つの意義があるが、詩作は「際立った意味」(ebd.)でのそれに属す。それに対して、「手入れをしたり、育成すること(colere)」(VA 185)および「建物を築くこと(aedificare)」(VA 196)は、いわば第二次的な意味の建てるということになるだろう。このような区別にもとづいて、後者の派生性格が次のように語られるのは理解しやすい。

「作物を農民が手入れをするという意味での建てること、建物や工場を設置したり、さまざまな道具を整えるという意味での建てることは、すでに住まうことの本質結果ではあるが、しかし住まうことの根拠でもないし、それどころか根拠づけるものでもない。」(VA 185)

さて、ヘルダーリンの詩行をここで再度取り上げて、ハイデガーによる解釈の大まかな方向だけでも確認したい。

「功績は多けれど(Voll Verdienst)、だが詩人のように、人間はこの大地(Erde)に住まう」(ebd.)

人間は「功績は多けれど」と言われる場合、その「功績」の内容として、いましがたみた第二次

的な意味の「建てる」が含意されていると考えられる。ヘルダーリンは、人間の「功績」を一たんは認めた上で、「詩人のように人間は住まう」と言う。もちろん、それは空想的に生きるということではなく、詩作するという生き方を生きることである。

「詩作とは、人間をまず大地の上に手渡し、大地に属させ、そうして住まうことへともたらす。」(VA 186)

3 ハイデガーによる詩句解釈上の論点

最初に、解釈上問題となるヘルダーリンの詩の一部を記しておく。それは「好ましい青空に咲き満ちて、金属の屋根がついた教会の塔がある」(VA 181) ではじまる詩からとられた。

「許されるだろうか、人生が苦役に満ちていれば、人は、
見上げて言うのを、
私もまたそうありたいのだ、と。そのとおり。優しさが (Freundlichkeit)、そして純粹さが、依然として、まだ心にあり続ける限り、人は神性 (Gottheit) にてらして自己を測るとしても、不幸にはならない。神 (Gott) は未知なるものか。
神は天空 (Himmel) のように明らかなものか。この明らかなことを、
私はむしろ確信する。人間の尺度がそれなのだ。
功績は多けれど、だが詩人のように、人間はこの大地に住まう。ところが星を湛えた夜の闇は、
より純粹無垢ではない、
そう言うことがもし私に許されるならば、神性の似姿かもしれない人間よりは。
大地に尺度はあるのか。
無い。」⁷⁾ (VA 188)

3-1 「次元」

人間が住まう大地とは、「奉仕して担うもの、花咲き実をつけるものであり、岩塊や水域へと広

がり行き、生まれ出て植物や動物となる。」(VA 143) そして、人間が見上げやる天空とは「アーチ状に動く太陽の運行、満ち欠ける月の動き、星たちのゆらゆらするきらめき、年の時節とその変わり目、日中の光と薄明かり、夜の闇と明るさ、天候の快と不快、雲の流れ、そしてエーテルの青みを帯びた深さである。」(VA 144)

人間が住まう「大地」と、彼が見上げやる「天空」との関係に先ずは注目したい。

「見上げることは、天空と大地との間 (Zwischen) を測る。この間なるものが、人間の住まうことに授け与えられている。それによって天空と地の間なるものが開かれることになる、この授け与えられた、隅々まで測られたものを、われわれはいま次元 (Dimension) と名づける。」(VA 189)

ここでいう「次元」とは、「空間の広がり」を言うのではもちろんない。ハイデガーによれば、「次元の本質は、明け空かされ、そうして隅々まで測ることが可能となった間なるものを授け与えることである。」(ebd.)

人間が次元を隅々まで測るのは、天上的なものへ向かって自分を測ることによってである。したがって、ハイデガーは神を、人間の自己測定という点から次のように捉える。

「神とは、人間が自分の住まうことを測り、天空の下の大地上に留まることを測る尺度である。」(ebd.)

人間にとっての「尺度」として「神」が見定められたことで、「天空」と「大地」および「神」と人間という死すべきものの「四項関係」が成立する⁸⁾。ここから、人間が「住まうこと」の根もまた、「神」を見やりつつ測る人間のまなざしに求められる。

「人間の住まうことは、天空が大地と同様に十全に帰属している次元を、見上げつつ測ることにもとづく。」(ebd.)

3-2 「尺度」を受け取ることとしての詩作

ところで、第2節で示した詩作の規定は、「住むことであらしめること」として「際立った意味」での「建てること」であった。いまや、「詩作することは測ることである。」(VA 190) とされ、「尺

度」の受け取りという事態をハイデガーは次のように述べている。

「詩作することにおいて、尺度を受け取ることが生起する。詩作するとは、語のもっとも厳密な意味での尺度を受け取ることであり、これによってはじめて人間は自分の本質の広がりについての尺度を受け取ることになる。」(ebd.)

以上のように、「詩人的なもの」の本質を、ヘルダーリンは「尺度」を受け取ることに見ているが、ヘルダーリンにとっての「尺度」(むろん「神」であるが)はより詳しくはどういうものであろうか。

「神はヘルダーリンにとって、神であるものとして未知(unbekannt)なのであり、だからこのような未知なるものとして神は、その詩人にとってまさに尺度である。」(VA 191)

未知であるとともに「尺度」でもある「神」について、ハイデガーはこうコメントする。

「未知にとどまる神は、おのれを神であるものとして示しながら、未知にとどまるものとして現れなければならない。神の明らかさ(Offenbarkeit)は一神そのものでなく一謎に満ちている。」(ebd.)

「神の明らかさは謎に満ちている。」だが、ヘルダーリンは「神は天空のように明らかなものか。」と問いつつも、「この明らかなことを、私はむしろ確信する。人間の尺度がそれなのだ。」と記す。肝要なのは、「神」が人間の「尺度」であるという場合、その内実をどう考えたらよいかである。

そこでハイデガーは、「非秘匿性」としての真理の概念にもとづく問題構成において、次のような表現で答える。

「尺度は、未知なものにとどまる神がそうしたものとして、天空を通してあらわになる仕方にある。天空を通した神の現れは、おのれを秘匿するものを見させる或る開披にある。その開披が秘匿されたものをその秘匿性から引き抜こうとすることによって、見させるのではなく、ただ、その開披が秘匿されたものをその隠れる働きにおいて見守ることによって見させるのである。」(ebd.)

したがって、人間にとっての「尺度」は、未知なものにとどまる「神」があらわになる仕方である、と精確に言い改めねばならない。

「かくして、未知の神は、未知なるものとして、

天空の明らかさによって現れる。この現れが尺度であり、人間はこのことによって自己を測る。」(ebd.)

ここで、いわばつねに現前する、その意味で既知の「神」が「尺度」として考えられてないことはいうまでもない。それゆえ、これは「なじみのない尺度」とも呼びうる。したがって、詩作は「尺度」を見つけだすことから始めなければならない。

「この尺度を見つけだすこと、これを尺度として推しはかること、そしてこれを尺度として受け取ること、これが詩人にとって詩作することである。」(VA 192)

3-3 ヘルダーリンにおける「神」

ヘルダーリンにとって「神とは何か。」(VA 193)について考える手がかりを、ハイデガーは以下の別の詩行に求める。

「神とは何か。未知なり。にもかかわらず
特性はふんだんに顔をのぞかせる、
天空に、その表情として。稲妻はすなわち
ある神の怒り。あるものが不可視であればあるほど、
疎遠なもの(Fremdes)におのれを送る…」
(VA 194)

人間にとって、見上げる「天空」の光景は見慣れたものだが、しかし「未知」であり「不可視」の「神」は「疎遠なもの」に含まれる。

「詩人はこうした見慣れた様々な現れのなかに、疎遠なものを、そこへ不可視なものが送られているものとして呼び起こす。そうして、不可視なものは、未知なるものとしてとどまる。」(ebd.)

見慣れたもののなかに「疎遠なもの」が潜んでいる事態は、確かに異様な感じを与えずにはおかないが、しかし、このことがかえって「疎遠なもの」の「不測の近さ」(VA 195)ということを教えてくれる。

「詩作することで受け取る尺度は、不可視なものがその本質をいたわるような疎遠なものとして、天空の光景における見慣れたものと寄り添い一体となる。それゆえ、その尺度は天空と本質的に同じあり方である。」(ebd.)

4 一つの文明批判

詩作は「際立った意味」での建てることである、ということが以前指摘され、その含意が前節までに追究された。だが、「建てること」の第二的な意味との関係については詳しく論じられていなかった。ここで、二つの「建てること」の意味連関について（ということは、結局は詩作について）再考したい。

「詩作することは、住まうことの次元を本来的に測ることとして、始原的な建てること(anfaengliche Bauen)である。詩作することは、人間が住まうことをなによりもまず住まう本質へと向かわせる。詩作することは、根源的に住まわせることである。」(VA 196)

詩作することが、「始原的な建てること」と言われているのに対して、作物を育てたり建物を築いたりする営みは、繰り返すが、詩作を俟って可能とされる。このことの意味合いは、どのようなことであろうか。

文化をふくんだ広義の現代文明に向けての、ハイデガーなりの仕方で行われた批判と本論はみる。巨大なハイテク建築物に代表される現代文明は、なるほど「功績は多い」。しかし、ただそれだけのことであって人間の本質には触れない。現代文明のなかで、「死すべきもの」としての人間が、自身に授け与えられるものを受け入れることはもはや困難である。その理由をハイデガーは次のように分析する。

「おそらくは、われわれが非詩人的に住んでいることは、そして住まうことがその尺度を受け取ることができないのは、猛烈な速さで測ったり計算したりすることの、稀有な過剰に由来すると言えるのではあるまいか。」(VA 197)

文明生活が要求する「猛烈な速さで測ったり計算したりすること」に追い立てられて、人間は、「天空」の下この「大地」の上で真に住まうことができないでいる、というわけである。ゆえに、これこそ、「住まうことの本来的な困窮」(VA 156)と名指される事態であり、当然「住宅不足」とは何ら関係をもたない。ハイデガーは一縷の望みを、ヘルダーリンの詩行にならうかたちで、こう述べる。

「優しさ(Huld)の到来が続くかぎり、人間がおのれを神性にてらして測ることは成功する。」(VA 198)

おわりに

「応答－その1」で述べた建築家たちのふるまいは、ハイデガーの思考地点からみればどのように評価されるべきであろうか。文明が要求する価値観(流行)のみに頼って、住まいを建てることは、人間が住まうことの本質にはやはり届かないだろう。「人間がおのれを神性にてらして測る」ときにのみ、すなわち、人間がおのれの有限な存在に自覚的になるときにのみ、「住まうこと」の核心に達するのではあるまいか。そしてそのときはじめて、「建てる」ということができると言えまいか⁹⁾。

注

ハイデガーからの引用は、略号の後にページ数を記す。全集からの場合、略号の後に巻数。

VA: Martin Heidegger, Vortraege und Aufsaeetze, Neske, 1997. 8Aufl.

GA: Martin Heidegger Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann

- 1) 「ダンボールハウス」と言うらしい。五十嵐太郎『現代建築に関する16章－空間、時間、そして世界』(講談社現代新書、2006年) 97頁参照。なお、書中、「ハイデッガーは説く」の一節を設けて、ハイデガーの「ヘーベル家の友」からの引用をしているが、ハイデガーの哲学にまでは踏み込んでいない。
- 2) 建築家ではなく彫刻家イサム・ノグチの言葉。佐々木健・『美学への招待』(中公新書、2006年) 135頁参照。出典および、イサム・ノグチがその言葉にこめた意図は不明。
- 3) 「ヘルダーリンの詩作は、詩作の本質をひたすら詩作するという詩的な使命によって担われている。」(GA 4.34) 「映画についての映画」や「歌についての歌」が、それぞれの本質について鋭く迫ることを思えば、この言葉も理解可能であろう。
- 4) 予定されていた「中期ハイデガー研究」をいわば飛び越えて、ここで1951年のテキストを取り扱うのは「約束違反」だという謗りを受けるかもしれない。しかし、私としては、この時期のハイデガーから、40年代および30年代の彼の思索の道を振り返る手もあると思っている。
- 5) 後出「3-2「尺度」を受け取ることとしての詩作」参照。

- 6) 古語の建てること (bauen) が、ich bin, du bist と親近で、この ich bin, du bist が ich wohne, du wohnst を言うことから、「建てること」が導入されている。Vgl. VA 141
- 7) 『哲学者の語る建築』（伊藤哲夫、水田一征編・訳、中央公論美術出版2008年）所収の翻訳をほぼそのまま利用した。3-3の「神とは何か。」についても同様。
- 8) ここでは「神」だが、「神的なものたち」だとすれば、「天空」「大地」「死すべきものたち」とともに単純統一態である「四方域 (Geviert)」をなす。Vgl. VA 143ff.
- 9) 「シュバルツヴァルトの農場」を具体例として挙げている。Vgl. VA 155